

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 122 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成12年12月 日

ア オ ア シ シ ギ



2000. 8.27 当別川排泥地 撮影者 関口 健一

〒063-0022 札幌市西区平和2条1丁目1-26



も く じ

私の探鳥地 (38) 北村幌達布 (空知郡)	佐藤 幸典	2
傷 病 鳥	小野 宏治	3
バンディング (鳥類標識調査) とバンダー (鳥類標識調査者)	田子 元樹	6
北海道レッドリスト (鳥類)		
- 北海道の絶滅のおそれのある野生生物リスト -		
広 報 部		8
サロベツ原野・ベニヤ原生花園一泊特別探鳥会雑感		
井上 公雄		9
野口正男さんを偲んで	羽田 恭子	11
不明鳥とsp.について	広 報 部	11
松山資郎先生への追憶	竹越 俊文	12
谷口会長がフクロウの画集を作成		13
探鳥会ほうこく		13
探鳥会あんない		15
鳥 民 だ よ り		15

私の探鳥地 (38)

北 村 幌 達 布 (空知郡)

佐 藤 幸 典

私のフィールドは北海道です。その中で良く行く所はやはり近場の北村幌達布 (次からは幌達布) です。

岩見沢から行くと、新篠津に渡る岩見沢大橋の手前で、石狩川の左岸側です。石狩川と幾春別川との合流点、石狩川と旧美唄川との合流点の間。幾春別川左岸で最下流側の河川敷内と堤防外側どちらも見どころがあります。

季節的には草原の鳥が見られる夏場が一番です。

目玉は何と言ってもシマアオジでしょう。ノゴマ、オオジュリン、コヨシキリ、ノビタキ、ベニマシコ、モズ、アカモズ、オオジシギ、カッコウ、ショウドウツバメ、カラヒワ、アオジはまず間違いなく見られます。

ワシタカではチュウヒがだいたい毎回見られます。時々にはチョウゲンボウやノスリも見られます。オジロワシが夏に数度見られた事もありました。何とその年は江別で繁殖していたそうです。

今年はシギ、チドリがたくさんやって来ました。コチドリ、タカブシギ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、ヒバリシギ、オジロトウネン、アオアシシギ、クサシギ、オオジシギ、コアオアシシギ等でした。

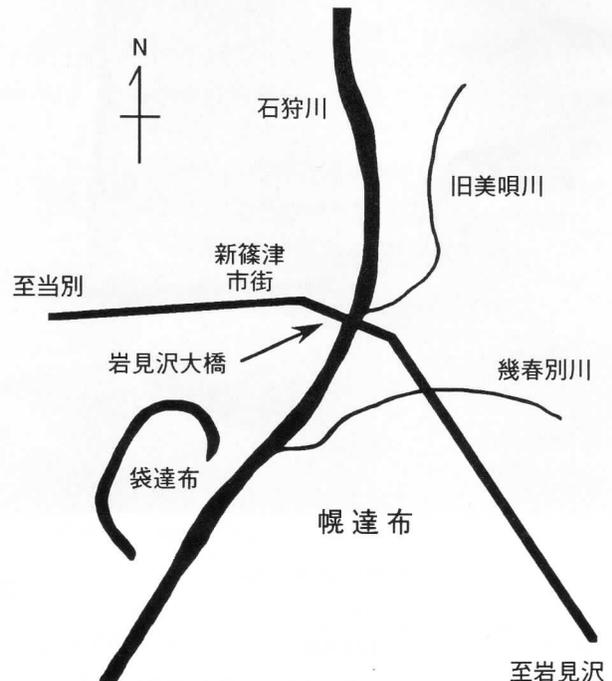
ウズラも繁殖していますが、声はすれども姿はなかなか見られません。今年は河川敷内の牧草刈りのあとの草丈がすっかり短くなったところで番 (つがい) が見られました。♀早別々には撮影しているのですが、かなり遠目でも番なので夢中でシャッターを押しました。

イソシギやコチドリも繁殖していて、時々レンズの最短撮影距離以内どころか、足下や車の下をチョコチョコと歩き回ることがあります。マクロレンズで写したくなるくらいなのですが、何せじっとしてくれなくて実現していません。

草原なので日ざしを遮るものではありません。夏の暑い日はちょっときついですが、夏は暑くなくては。窓もドアも開け放してうたた寝しながら自然の恵みを享受するのも気持ち良いものです。

この幌達布も今様変わりしています。幾春別川の河口をもっと下流側という川筋を変更する工事をしているのです。新しい川筋を掘り起こし、土砂をダンプでどんどん運び出し、側溝ができて一部はコンクリートの護岸工事も進んでいます。

その側溝に今年シギ、チドリがたくさんやって来たのです。ただその側溝もあと数年後には新しい幾春別川の川底

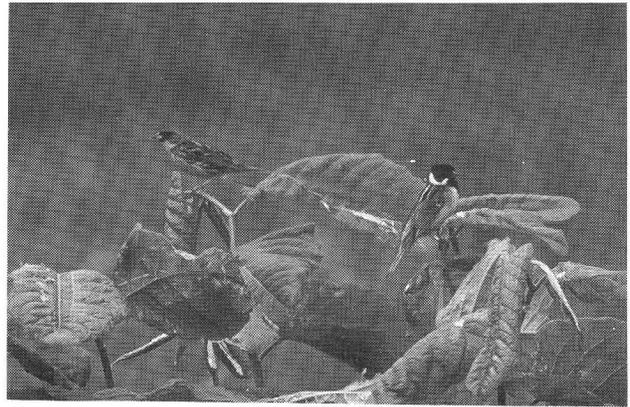


になる予定です。工事は多分10年位前から始められていて、側溝が掘られてそのままのところに柳の林ができていました。柳の何本かはソングポストになっています。

その林の脇にシマアオジが繁殖したのです。その巣がダンプの通り道の下になり壊されてしまったのです。壊された後ではどうにもなりません。札幌ではシマアオジが減ってきたとか、全然見られなくなってしまったとか聞きます。資材置場や開発行為のせいではと聞いています。幌達布もやがて札幌のようになるのかと危惧されます。

しかし私はここでの繁殖はこれからもずーっと続けられると思っています。単年での動向は気象、工事、その他の諸事情により変動するとは思いますが。私はシマアオジがそんなに華奢にはできてはいないと思います。ここで20年近くシマアオジを見てきました。繁殖時期は毎年牧草刈りをしていました。それでも懲りずに又新しい子育てに励んでいます。そして毎年やって来て楽しませてくれています。種の保存はそんなに柔ではないと思います。

それでもちょっと心配な事は、私の目から見た限りでは同じような環境下であっても、幌達布の近隣や対岸の新篠津ではシマアオジを見ていません。私には微妙な環境の違



オオジュリン（左）とアオジ（右） 筆者撮影

いはわかりませんが、逆にシマアオジはそんなに繊細な感覚の持ち主なのかなとも思います。私が知らないだけで、わかっている人には当たり前の常識なのかもしてませんが、知っている人には是非教えていただきたいものです。

変化激しいこれから数年を、色々な意味でじっくり見届けて行きたいと思っています。

〒068-0834 岩見沢市駒園7丁目7番19号

傷 病 鳥

北海道海鳥センター研究員 小野宏治

北海道海鳥センターは、札幌からバスで4時間弱、道北の羽幌町にあります。種の保存法にもとづき、1997年に環境庁によって建てられた野生生物保護のための施設で、羽幌町と共同で運営されています。海鳥研究・普及啓発施設としては日本で初めて、かつ唯一であり、仕事は多岐にわたっています。

地元・天売島の海鳥調査はもちろんですが、施設内展示の定期的な更新や、ホームページによる情報発信もそのひとつです。また、国内外の情報拠点として、毎日多くの電子メールによるやりとりがあります。マスコミの問い合わせも頻繁で、問い合わせの内容から逆に情報をもらうこともあります。

そして、開館以来ほとんど絶えることのない仕事として、傷病鳥の世話があります。職員体制から、「傷病鳥は引き受けない」というのが建て前となっています。ですが、地元の小学生が「このスズメ、助かりますか」といって持ってきたりする鳥を、傷病鳥保護の必要性や是非は別として、なんとかしたいというのが心情です。

海鳥そのもののお話は別の機会に譲るとして、今回はセンターに来た傷病鳥のことを記したいと思います。

センターには獣医さんこそいないものの、友の会を中心

に熱意ある人たちが集まります。傷病鳥の世話と一口に言っても、なかには一時間に一度の割合で餌をあげないといけない鳥や、骨折をしている鳥もいます。幸い、車で1時間ほど走った留萌市に小鳥の治療に詳しい獣医さん（橋場トントン動物病院）がおり、お世話になること度々です。熱意ある外部スタッフの支えあればこそ、今日までやってこれたといえます。これは傷病鳥に限らず、センター機能すべてにわたっていえることです。

さて、オープン以来、どれくらい傷病鳥が来たでしょうか。この原稿を書くためにデータをまとめてみて、スタッフはみんなびっくりしました。40種類56件80羽です。開館四年にも満たないこの小さな施設で、よくこれほどの鳥が来たものだと感じます。スズメやドバトにまじって、コウミスズメやハシブトウミガラスなど海鳥が多いのも、海鳥センターならではです。

当時の様子を思い浮かべながら、鳥の生態を織り交ぜてみなさんと一緒にみていきましょう。

- (1) アオジ
- (2) アオバズク
- (3) アオバト

アオバトは、“海水を飲む鳥”として有名です。なぜ大

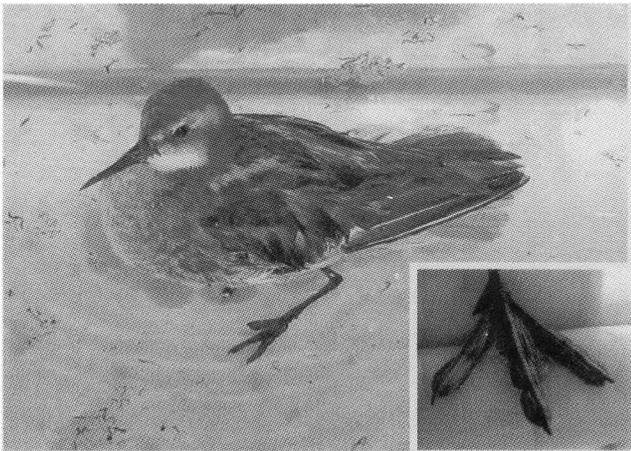
きな危険を冒してまで海水を飲みに来るのか、まだわかっていないことがたくさんあります。羽幌郊外の場合、海岸に出るためにアオバトは交通量の多い国道を横切らなければならず、車に轢かれて死んでいる姿をととき見かけます。

このアオバトは、車ではなく鳥かネコに襲われたらしいのですが、とても神経質な性格で、いつもびくびくしていました。秋に預かり、春までもう一步というところで残念ながら落鳥してしまいました。

(4) アカエリヒレアシシギ

港近くの造船所でうずくまっているところを保護されました。5月の一時期、天売航路では砂粒を撒いたように海面一面がアカエリヒレアシシギでいっぱいになるところがあります。渡りの途中で餌が十分にとれないと、こうして衰弱し、命を落としていくのでしょうか。センターでは熱帯魚用の冷凍赤虫や、田んぼでとってきたミジンコをあげたりして保護しましたが、2週間ほどで落鳥してしまいました。

ちなみにこの鳥はメスのほうが派手で、繁殖地ではオスが子育てをします。



アカエリヒレアシシギ

- (5) アカショウビン
- (6) アカハラ
- (7) アビ
- (8) アリスイ
- (9) イスカ

英名、Crossbillの名の通り、交差した嘴が特徴のこの鳥も、渡り途中に焼尻島で保護されました。当時、ウズラとウミネコが同時に収容されており、仕方なく会議室を閉め切ってそこに放し飼いしていました。しかし、収容してから10日ほど経過したある日、イスの背もたれ部分の布地が、一晚にしてあのペンチのような嘴でぶちぶちと切られてしまっていたのです。被害を受けたイスは5つほどありました。イスカにしてみれば、狭い部屋の中でかなりストレスがたまっていたのでしょう。泣くに泣けず、あわててイスを隠しました。体力も回復したところで無事に放鳥す

ることができました。

- (10) ウズラ
- (11) ウトウ
- (12) ウミウ

ウの仲間は、世界におよそ40種、日本では4種類が分布しています。

ウミウは、日本周辺にだけ見られます。カワウとよく似ていますが、おそらく氷河期の頃に地理的に隔離され、カワウからわかれて進化したものと考えられています。羽幌では最も普通に見られるウで、天売・焼尻の両島で繁殖しています。

巣立ち時期になると、若いウミウがよく運ばれてくるのですが、センターで保護した4件中すべてが衰弱によるものでした。

十数cmの大きさのチカを、一日40~50匹程度食べます。慣れてくると大きな口を開けて餌を与える人めがけて飛びかかってきます。

ウの仲間は水中に潜って魚をとりますが、ウトウやウミガラスが翼を使って潜るのに対し、足を使って潜水します。そのため、普通の鳥は前に3本、後ろに1本の指があるのに、ウの場合は4本すべてが前を向き、その間に大きな水かきが張られています。そして、ダイバーの足ひれのように水中で大きな推進力を得ることができます。

- (13) ウミスズメ
- (14) ウミネコ
- (15) オオセグロカモメ
- (16) オオハム
- (17) オオヨシゴイ
- (18) カルガモ
- (19) カワラヒワ
- (20) キクイタダキ
- (21) クロツグミ
- (22) コウミスズメ

海鳥のなかでは最も小さく、スズメを太らせた程度の大きさです。プランクトンなど小さな餌を食べるのに適した、スプーンのような丸い嘴をしています。一方、ケイマフリやウミガラスなど魚食性の鳥は、箸のようにとがった嘴をしています。よく、その人の性格が顔にあらわれる、などと言いますが、鳥の場合も顔を見るとどんな餌を食べているのかおおよそ見当がつけられます。

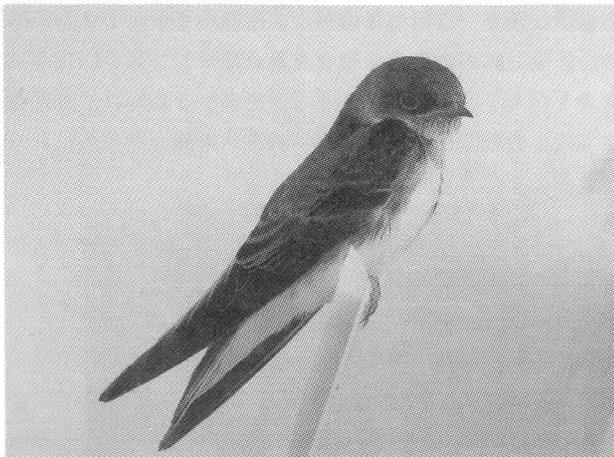
さて、この鳥は冬の寒い日に羽幌港で保護されましたが、腹部には黒い油のシミがありました。油で汚染された鳥は、油を落とす前に十分な保温と体力回復が必要です。一見元気そうだったので洗浄することにしたのですが、見る間に元気がなくなり、あえなく落鳥してしまいました。

- (23) コノハズク
- (24) コハクチョウ

- 25) コミミズク
- 26) コルリ
- 27) シジュウカラ
- 28) シマセンニュウ
- 29) シメ
- 30) ショウドウツバメ

ショウドウツバメは“小洞燕”、崖に穴を掘って子育てをします。苫前町の河口にあるコロニーで、営巣崖から落ちているところを発見、保護されました。

保護されたのは全部で4羽で、そのうち一羽は落ちてからかなり時間が経っていたので、元気がなくてすぐに死んでしまいました。残る3羽のうち2羽は1ヶ月ほどして無事に放鳥することができましたが、1羽は成長が遅れ、いつまでたっても飛ぼうとしません。親鳥が与える餌とは違い、人が与える餌は栄養的に偏りがあるようなのです。それでも、ミルワームにベビーフードやコオロギ、シジミなどをまぶしてあげて、1週間ほど前からようやく事務所のなかを飛び回るようになりました。仲間がみんな南へ去ってしまった今、放鳥は来年の春までお預けですが、元気に生きていてほしいと思います。



ショウドウツバメ

- 31) スズメ
- 32) タシギ
- 33) ツツドリ
- 34) ドバト
- 35) トビ
- 36) トラツグミ
- 37) ハシブトウミガラス
- 38) ヒバリ
- 39) マガモ
- 40) ミツユビカモメ

外洋性のカモメで、海がしけて港に避難しているときにカラスに追われ、天売島で保護されました。英語ではKittiwakeといい、子猫(kitty)のようなかわいらしさからきていると思って聞いたら、鳴き声に由来するようです。

CDで聞くと、たしかに「キティウエイク」と聞きとることができました。とても愛らしく、大好きな鳥のひとつです。

傷病鳥の保護は、生態系の保全にはほとんどまったく貢献しません。とくに、油汚染鳥については、ペンギンなど一部の鳥を除いては、多くの鳥で放鳥後の生残率もきわめて悪いことから、海外ではあくまで“人道的な見地から”保護するという見方ができており、汚染後の生態系の保全により多くの予算を費やすという考え方に移りつつあります。

しかし、我々のような施設には現実的に多くの傷病鳥が持ち込まれ、十分な設備も体制も予算もないままに、対処しているのが実状です。

また、傷病鳥は一般的には道の管轄ですが、希少種については環境庁と、対応もまちまちです。緊急時の対応も含めて今後、どう問題を解決していくのか、関係者で話し合う時期に来ているといえます。

お知らせ 日本海鳥グループが設立されました

新聞等でご覧になった方もいらっしゃると思いますが、このたび、国内の海鳥研究者らにより日本海鳥グループが設立されました(事務局・北海道海鳥センター)。日本海鳥グループは、

1. 海鳥に関するさまざまな情報を広く交換し、研究・保護活動に貢献すること
2. 繁殖地のセンサスやモニタリング、洋上分布や海岸調査等におけるさまざまなベースライン調査を組織的に行うこと
3. 海と海鳥に関する幅広い普及啓発活動を行うこと

をおもな目的とし、来年2月を目標に日本の海鳥に関する繁殖地目録を作成することにしています。

財政的に日本の海鳥研究を支えていただける方は、ぜひグループ宛の寄付をお願いいたします。また、海鳥の保護と研究に関心のある方なら誰でも会員になれますので、専門的な情報を必要とされる方は日本海鳥グループ事務局まで入会案内をご請求ください(年会費2,000円より)。

寄付金の振込先(郵便局)は以下の通りです。

口座名 日本海鳥グループ
口座番号 02700-4-23695

連絡先: 日本海鳥グループ事務局
〒078-4116

北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
北海道海鳥センター内

Tel 01646-9-2080 Fax 01646-9-2090

E-Mail: JSG@seabird.go.jp

バンディング(鳥類標識調査)とバンダー(鳥類標識調査者)

北海道バンダー連絡会会員 田子元樹

はじめに

野鳥愛護会会員の皆様にはいつも、フィールドで親切にして頂いて大変感謝しています。バードウォッチングの楽しさを教えていただいたのも愛護会の探鳥会でした。

皆さんは、バンディングってご存知ですか? 鳥類標識調査をバンディング、鳥類標識調査者をバンダーと言います。さて、どうして僕がバンダーになったかをここでお話しましょう。

鳥が何よりも大好きで大切にしたい。鳥の事をもっと知りたい、そして自然を大切にしたいと思っています。そして鳥の渡りに興味を持ちました。ある時、北大演習林でバンダーの方と知り合いました。そして、バンディングのお話を数時間に渡って聴く事が出来ました。私の気分は渡り鳥のように舞い上がりました。そして、故三浦二郎先生の網場へと足を運ぶ事になりました。95年の秋です。ほんの少しのシーズンを三浦先生の網場へ通い他の実習している方達からも鳥の扱い方、測定の実技などたくさんの事を学びました。

その後、札幌羊ヶ丘にある森林総合研究所で標識調査を行っている研究者の方にお世話になる事になりました。鳥の扱い方、種、雌雄、年齢など初めからの実習です。バンディングは鳥を捕獲し、標識を付けることが一番の仕事なのですが、必ず最優先される事はまず鳥を中心に考える気構えから始まります。

ウォッチャーの方から見るとバンダーにはあまり良い印象を持っていない方もいると聞いておりますが・・・でもウォッチャーとバンダーの共通する気持ちは一緒のはずです。鳥を愛し、自然を愛する気持ちは全く同じです。でも、バンダーは鳥を捕まえて、いじめているように見えますね。気持ちよく空を飛んでいる鳥を見えない網で捕まえるのですから・・・

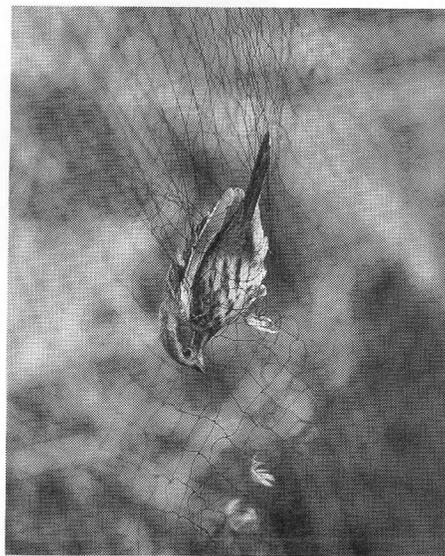
標識調査によって鳥の寿命、渡りのルート、越冬地、繁殖地などを知る事が出来ます。バンダーは山階鳥類研究所のボランティアで、標識調査を手伝っているわけです。私は99年山階鳥類研究所1級鳥類観測ステーション新潟県福島潟のバンダー講習会でバンダーライセンスを取得し、今年度から標識調査に従事しています。

鳥類標識調査について

鳥の繁殖、渡り、越冬地などについては調べられていますが、個々の鳥が何処を通過して越冬地や繁殖地に行くのかを調べるために標識調査が必要と考えます。バンダーは研

究目的以外では繁殖期にバンディングはしませんが、今までの研究結果をみる限り繁殖期のバンディングは必要と考ええます。例えば青森を繁殖地にしているコジュリンは千葉県で越冬しているようです。千葉県の葦原などでは夏も冬もコジュリンが見られますが、千葉県を繁殖地にしているコジュリンは静岡県で越冬しているようです。このようなことは標識調査でなければ解明できない事であり、繁殖期に調査をしなければわからない事です。私は5年間標識調査の実習を春の渡り時期(4月~6月)と秋の渡り時期(8月~11月)にしてきました。春の実習調査でよく解ったのですが、アオジやオオジュリンなどは必ず越冬地から繁殖地に帰ってきます。そして繁殖を始めます。

鳥は繁殖地に執着している事がよく解りました。他の鳥たちにも同じ事が言えるのではないのでしょうか? シマアオジも繁殖期に標識調査をし、越冬地は何処なのかという事も標識調査でなければ解らないと思います。そこで繁殖地の保全、越冬地の保全をしなければシマアオジの保護にもつながりません。このような事を調べるためにも鳥類標識調査は必要であり、繁殖地、越冬地の保全などの役に立つと考えています。

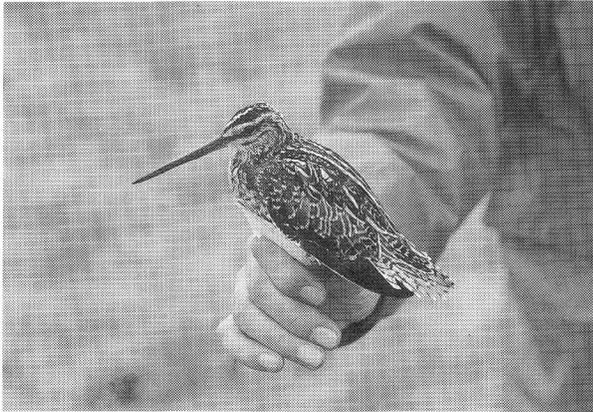


捕獲されたアオジ

バンダー志望の方たちへ

バンダーになるためにはバンダーライセンス取得者(経験3年以上)について鳥の識別、測定などを学びます。そのほか網の張り方など・・・そして、指導バンダーから山階鳥類研究所に推薦状をもらいます。私は5年間指導バンダーの所で実習を積みましたが、最低でも数年実習を重ねて講習会に行くのが望ましいようです。一人で調査

をできるようになるまでの経験を積みあげ、一人で標識調査をできるまでの技術を身につける事が重要です。北海道バンダー連絡会というバンダーとバンダー志望者などで作られている組織もあり、バンダー志望の方達との共同調査など、バンダーへの門を広く開いています。



捕獲されたタシギ

バンディング講習会に参加して

バンディングの講習会は新潟県環境庁鳥類観測ステーションで5日間、早朝から夜間まで講習と実技を行います。講習は法令、測定、年齢査定、雌雄の判別など講義、実習を行い、パソコンでのデータ処理などを山階鳥類研究所の研究者から指導を受けます。そして、100種スライド識別テスト、剥製識別テスト10種（これが結構難しかった）などです。バンディングの実技はモズばかり掛かり、講習者をしてこずらせていました。モズは目が大きくてかわいい鳥ですが、嘴が鋭く噛まれるとものすごく痛かったのが思い出となりました。

今後の標識調査について

バンダーは標識調査を始めると夜明けの1時間前には網を開き調査を始めます。鳥が動き出す前にはすべての準備作業を終わらせます。道内では約60名ほどが各地で標識調査に従事していますが、皆さん同じく、春秋の渡りの時期には毎日調査を実施しているようです。実際は眠いし、行きたくないし、汚いし、臭いし、辛い事ばかりであまり良い事はありません。肝心の鳥見はできなくなるし・・・でも、やりがいがあります。春一番のルリビタキ、ミソサザイ、コマドリで春の調査は始まって、エゾセンニュウで終わります。秋には8月にムシクイ類の渡りが始まります。夜間にはオオジシギ、コノハズクなどを調査する事もあります。そして9月の下旬を過ぎるといよいよホオジロ類の渡りが始まります。

これから書く事は私の希望と言いますか・・・先ほども述べた通り標識調査の意義を理解しております。そこで、ウォッチャーとバンダーが共同で渡りの調査をしてみてもどうかと考えています。ウォッチャーは目視観察で渡りの方向や鳥の飛び方、高度、方向、数のカウントなどを、バンダーは標識調査を。ウォッチャーとバンダーが同じ目的で渡り鳥の調査を一緒にできれば良いと思います。種の維持が危険な鳥こそウォッチャーとバンダーで協力しあい、保護や繁殖地、越冬地の保全をし、みんなで大好きな鳥をいつまでも大切にしたいと願っています。

〒063-0826 札幌市西区発寒6条13丁目
リーベスト宮の沢507

鳥類標識調査結果の例：オオジュリンのリターン・リカバリー状況

表1 石狩市生振で放鳥し、他地域でリカバリー（回収）された例

リング	放鳥日	性	齢	回収日	性	齢	経過日	回収地
2 L-10698	97.06.22	U	N	97.11.03	M	1 W	134日	福岡県福岡市西区毘沙門山
2 L-10757	97.07.05	U	N	97.10.24	F	J	111日	島根県益田市中須益田川河口
2 L-10784	97.07.27	U	N	97.11.09	F	J	105日	鳥取県米子市彦名町米子水鳥公園
2 L-82561	98.06.18	U	N	98.10.21	F	J	125日	新潟県柏崎市安政町悪田自然緑地
2 L-82537	98.06.18	U	N	98.11.08	M	J	143日	埼玉県富士見市水子
2 M-16011	98.07.22	U	N	98.11.04	F	J	105日	千葉県我孫子市根戸下北新田
2 M-16715	98.10.04	F	J	98.10.31	F	J	27日	鳥取県米子市彦名町米子水鳥公園

繁殖地から通過経路、越冬地までを追う事が出来る。

表2 石狩市生振へのリターン（帰還）状況（2000年の例）

リング	捕獲・放鳥日	性	齢	初放鳥日	性	齢	回収地
2 L-42403	2000.08.13	F	A	1997.09.07	F	A	1998.08.08にも捕獲・放鳥
2 L-82561	2000.04.30	F	A	1998.06.18	U	N	
2 N-51048	2000.05.02	F	A	1998.06.29	U	N	
2 M-16188	2000.08.07	F	A	1998.08.20	U	J	1999.08.24にも捕獲・放鳥
2 N-51044	2000.05.08	F	A	1999.06.26	U	N	

繁殖地に帰ってくる事を知ることが出来る

U：性不明 M：雌 A：成鳥 N：巣内雛 J：幼鳥 1W：第1回冬羽

資料提供：広川淳子

北海道レッドリスト（鳥類）

－北海道の絶滅のおそれのある野生生物リスト－

1991（平成3）年に、環境庁が編集した「日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－」により、日本における絶滅のおそれのある野生生物の種の概況が明らかにされましたが、地域ごとに現状は異なるから、地域レベルでの保護対策を検討する資料として、各都道府県でも地方版レッドデータブックの作成が検討されてきました。

北海道においても近年、開発の進展に伴う野生生物の生息・生息域の縮小や乱獲、移入種による影響等のため、野生生物の種の減少が進んでいます。このような状況のもと、北海道環境生活部では道内に生息する野生生物を対象として、絶滅のおそれのある種の現状を的確に把握した「北海道レッドデータブック」を作成し、平成12年3月31日付けで公表しました。ここでは、そのうちから鳥類について紹介します。なお、鳥類の検討は1996（平成8）年で終了しており、藤巻裕蔵（帯広畜産大学）、川路則友（森林総合研究所北海道支所：当時）、松岡 茂（森林総合研究所北海道支所）の3氏が検討委員となり、多数の専門家の協力を得ています。

カテゴリーについて

絶滅種：北海道ではすでに絶滅したと考えられる種または亜種

絶滅危機種：絶滅の危機に直面している種または亜種

絶滅危惧種：絶滅の危機に瀕している種または亜種

絶滅危急種：絶滅の危機が増大している種または亜種

希少種：存続基盤が脆弱な種または亜種

留意種：保護に留意すべき種または亜種

以上のうち、「絶滅危機種」「絶滅危惧種」「絶滅危急種」は絶滅のおそれのある種として位置付けられ、絶滅のおそれの度合いの高い順になっています。

選考に当たっての考え方

北海道に生息する鳥類の全種目録を作成し、種毎の分布、生息環境、営巣習性、渡り習性、観察記録、食性、捕獲数（狩猟鳥獣のみ）などを根拠として、絶滅のおそれがある等保護上重要と考えられる種が選定されました。ただし、北海道での生息数、確認数が少ない種であっても、数の減少や生息環境の悪化が見られない場合や迷鳥と考えられる場合は選定から除外されました。

絶滅種

トキ	
カンムリツクシガモ	

絶滅危機種

オオミズナギドリ	(1) (4)
チシマウガラス	(1)
ウミガラス	(1) (2) (3)
エトピリカ	(1) (2) (3)
ワシミミズク	(1) (2)
シマフクロウ	(1) (2)
ミュビゲラ	(1)

絶滅危惧種

サンカノゴイ	(1) (2)
コウノトリ	(1) (2)
オジロワシ	(1)
オオワシ	(1)
クマタカ	(1)
イヌワシ	(1) (2)
タンチョウ	(1)

絶滅危急種

カンムリカイツブリ	(2)
シジュウカラガン	(1) (2)
サカツラガン	(1) (2)
ミコアイサ	(1) (2)
ミサゴ	(1) (2)
オオタカ	(2)
ハイタカ	(2)

絶滅危急種（続き）

チュウヒ	(1) (2)
ハヤブサ	(2)
ヘラシギ	(1) (2)
アカアシシギ	(1)
カラフトアオアシシギ	(1) (2)
コシャクシギ	(1) (2)
ケイマフリ	(1) (3)
ウミスズメ	(1) (3)
クマゲラ	(2)

希少種

オオヨシゴイ	(1)a (2)b
チュウサギ	(1)a (2)b
コクガン	(2)b
マガン	(2)b
ヒシクイ	(2)b
ハクガン	(2)b
コハクチョウ	(2)b
オシドリ	(2)b
トモエガモ	(2)b
コケワタガモ	(1)ab
シノリガモ	(1)b (2)b
ハチクマ	(2)b
ケアシノスリ	(1)a
ハイイロチュウヒ	(1)a
シロハヤブサ	(1)a
エゾライチョウ	(1)a (2)a

希少種（続き）

ウズラ	(1)a (2)a
クイナ	(2)ab
ヒメクイナ	(1)a
ヒクイナ	(2)ab
シマクイナ	(1)a (2)a
チシマシギ	(1)a
ホウロクシギ	(1)a
オオジシギ	(1)b
セイタカシギ	(1)a
ツバメチドリ	(1)a
ウミバト	(1)a
マダラウミスズメ	(1)abc
シマフクロウ	(1)a
トラフズク	(2)b
キンメフクロウ	(1)a
ヨタカ	(1)a (2)ab
ヤマセミ	(2)a
アカショウビン	(2)a
コアカゲラ	(1)ab (2)b
ツメナガセキレイ	(1)b
アカモズ	(1)a (2)a
シマアオジ	(2)ab
ギンザンマシコ	(1)ab

留意鳥

オオアカゲラ	(1)
--------	-----

具体的要件について

表右欄の番号と記号は選定された具体的要件です。実際にはもっと詳しく述べられているのですが、要点だけをまとめてあります。

「絶滅危機種」

- (1) 個体数が非常に危険な水準にまで減少している。
- (2) 生息地の条件が極めて悪化している。
- (3) 繁殖能力をはるかに上回る捕獲・採取圧にさらされている。[注1]
- (4) 有力な生態的競争種や天敵が侵入している。

「絶滅危惧種」

- (1) 個体数が危険な水準まで減少している。
- (2) 生息地の条件が著しく悪化している。

「絶滅危急種」

- (1) 個体数が大幅に減少している。
- (2) 生息地の条件が明らかに悪化しつつある。
- (3) 繁殖能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。[注1]

「希少種」

- (1) 環境条件の変化によっては容易に上位ランクに移行する可能性がある。[注2]
 - a. 生息密度が低く希少である。
 - b. 生息地が極限されている。
 - c. 生物地理上、孤立した分布特性をもつ。
- (2) 種の存続への圧迫が強まっている。
 - a. 個体数が減少している。
 - b. 生息条件が悪化している。

「留意種」

- (1) 国際的、国内的に保護を要すると評価されている。

編集部より

注1：北海道の場合、漁網への混獲があげられます。

注2：上位ランクとは絶滅危急種以上を示します。

紙面の都合上およびわかりやすさ等のため、道が作成・公表したものに、表現変更、一部省略などの手を加えていますことをご了承ください。 文責：広報部

サロベツ原野・ベニヤ原生花園一泊特別探鳥会雑感

井上公雄

この度の特別探鳥会は昨年8月の幹事会の後、夏まつりで賑わう大通公園のピアガーデンでの雑談の中からでした。その後幹事会で話し合いを重ねるうちに蒲澤さんを窓口の中心に計画内容の具体化へと発展、3月発送の野鳥だより第119号と同封の年間予定表により皆様にお知らせ募集となったものでした。

道北の一部の地域で繁殖が確認されているツメナガセキレイ、アカエリカイツブリやシマアオジ、ノゴマなど草原性の鳥や、この時期の原生花園の花の観察、クッチャロ湖畔の早朝散策探鳥と盛り沢山の内容で、走行距離約750キロに及ぶやや強行日程になりましたが、初期の目的もほぼ達成、和気あいあいと楽しい2日間を無事に過ごすことが出来ました。

移動手段宿泊などの制約のためマイカーでの参加者も含め49名となり、参加出来なかった多くの方々には大変申し訳なかったと反省しております。

さて当日は朝7時大通西1NHK前出発と集合には少々無理な事情の方も万障繰り合わせ予定通りの出発になりました。

バスは国道275号線の穀倉地帯に転作畑作地の直線状の小麦の緑に咲き始めたジャガイモの花、ビニールハウスの点在する農村風景を眺めながら浦白でトイレタイム、ヒマワリの町北竜町から道道233号線を留萌へ、沿道の土手や道端の所々にフランスギク・タンポポ・コウリントンポポ

などの美しい群落を楽しみながら日本海沿岸へ、この間車内では用意された野鳥ビデオが放映され、電線の所々止まったカワラヒワ、ムクドリ、ハクセキレイ、モズや随所でトビが見られおやつを口に談笑を交わしマイカーから開放され一段と高い視点からの遠望を眺め旅行気分に入るうちに2度目のトイレタイムの小平鯉御殿で小休止、穏やかな海を左手に更に北へ向かいました。

間もなく沿道の丘陵地帯に巨大なプロペラが無風のタワーに静立する異様な景色が眼にとまりました。苫前町上平地区に民間プロジェクトが45億の巨費を投じて構築した風力発電事業、塔の高さ45米にデンマーク製直径54米のプロペラ3枚のタワー20基が丘陵地帯に林立し、自然エネルギーの利用により年間4,400万KWhの発電量は一般家庭14,600世帯の消費電力に相当するとのこと、更に本年中に60億を投じ19基が新設されるという雄大な事業で、環境問題解決の一助と観光スポットとしても注目されると思います。

やがて天売・焼尻島へ連絡の町羽幌町市街地を通過、洋上に浮かぶ両島も海霧の中、間もなく初めての観察地金浦原生花園に降りました。

既にエゾカンゾウの花は終わり咲き遅れのオレンジの花がポツポツに一同ががっかりしましたが、ノゴマの出現にすっかり気を良くしシマセンニュウ、ノビタキ、オオジギを後に遠別町富士見公園へ、小高い丘からの遠望を楽し

みながら昼食、付近の散策中にイソシギを発見、ここでもオオジギが飛びエゾセンニュウが鳴いていました。更に北へ向かう沿道の牧草地では一番草の刈り取りの最中、刈り取りの後に白黒のビニールのロールが並び、所々に乳牛が放牧される牧歌的な酪農地帯が続く合間の原野に、太い茎が枝分かれした先にカサ状の乳白色の花を咲かせるエゾニュウ、エゾノシシド、オオハナウド、穂咲きのオオシモツケなどは原野の風景を演出しているような感じです。

いつしか海岸砂丘林の風景へと変わり道路を挟んでエゾカンゾウ、紫紅色の鮮やかなハマナスなどのお花畑と道端の所々にコウリントンポポの群落が続き、サロベツ原野パーキングで小休止の後、間もなく内陸へと進路を変え幌延ビジターセンターへ到着です。

早速ウグイス、コヨシキリの鳴き声に誘われて木道へ。湿原にはエゾスカシユリ、ヒオウギアヤメなどが一面に、木道の側には小さなサワラン、トキソウ、ツルコケモモなど沢山の花々に足を引き止められながら間もなく長沼の水辺に着きました。岸边には可愛いコウホネの花が1~2輪咲き、楕円形の小さな葉を水面に散りばめたようなヒツジグサ、妖精のようなアオイトトンボが飛び交い、これが自然だと呼び覚まされるような感じです。

此処でのお目当てのアカエリカイツブリが沼の奥に、肉眼では見えにくい。30倍のスコープに捕らえたのを行列をつくって交替で観察しましたが、ツメナガセキレイは時期を逸したのか見当たりません。その他ノビタキ、オオジュリン、シマアオジにエゾセンニュウ、遠くからカッコウの鳴き声も聞こえ、限られた時間を惜しみながら近くの三日沼へバス移動です。着くとすぐ運良く間近に浮上潜水を繰り返すアカエリカイツブリの姿を全員がじっくりと観察、大満足の余韻と共にバスに乗り込みました。

次の目的地に向かって再び海岸線へ戻り暫く北上の後進路を内陸部へ、道の両側の黄色い花の絨毯の中をサロベツ原生花園へ向かいました。もう此処は何処までも果てしなく続く見渡す限りのエゾカンゾウ、ヒオウギアヤメなど色々な花の群落が続き、北の大地の真っ只中を実感しながらそれぞれに木道を散策したり、ツメナガセキレイやシマアオジなどを探し回るうちに忽ち時間になってしまいました。後ろ髪をひかれる思いでバスへ、暫く続いていた原生花園もいつしか畑作牧草地の里山風景へと変わり、行き交う車も疎らな山間道路を経て約70km、オホーツク海側の浜頓別町クッチャロ湖畔のホテルに着きました。早速温泉に入り汗を流しゆっくりする間もなく懇親会が始まりました。

美味しいご馳走や飲み物に舌づつみを打つうちに、顔見知りの人初めて出会った人、見覚えはあっても名前が分からない人などが自己紹介を進めていくうちにすっかり打ち解け、談笑も弾み懇親会も盛り上がりました。

明日に備え温泉に浸かって早めに寝る人や、遅くまで話

し込む人などそれぞれの一日を終えました。

翌朝薄明るさに目を覚ますと湖面は濃霧に包まれ、路面も濡れ時々傘も要る空模様、そんな中思い思いのグループが次々湖畔や周辺のウオッチングにお出掛けです。

緑に囲まれた静かな湖面に浮かぶユリカモメ、路上を足早に動き回るハクセキレイ、茂みの中から聞こえて来るエゾセンニュウ、シマセンニュウ、ウグイスの鳴き声やハシブトガラ、シジュウカラの巣立って間もない幼鳥の群れが、木立ちの中を餌ねだりしながら賑々しく動き回る場面など、特に目新しい出会いではなくても、初めての地での出会いには新鮮ささえ感じました。

なかにはフクロウを見て来たというグループもいて羨ましがらせたり、ホテル近くの電線や梢で、見る機会の少ないビンズイを霧雨のなかスコープを通して心ゆくまで観察しましたし、朝食後も2階の窓に集まり交替でじっくり観察できたことも印象強く残りました。

9時の開館を待ってクッチャロ湖水鳥観察館で、観察指導員の方から豊富なスライドを映しながらベニヤ原生花園の植物の解説やアドバイスを、長年ハクチョウのお世話を続けて来られた山内昇氏からはクッチャロ湖とその周辺の鳥や動物のスライドを見ながらお話を戴き有意義な一時を過ごしました。

ベニヤ原生花園に向かう頃には霧雨も上がり、薄日さえもれる絶好の日和になりバス10分ほどで目的に到着です。先ず昨日は十分に観察できなかったツメナガセキレイのポイントへ向かうことしました。

途中ノゴマ、ノビタキ、オオジュリン、シマセンニュウなどが草むらから飛び出し鳥の層の厚さを感じました。

梢ではビンズイも囀り開けた土地に針葉樹とビンズイの好む環境です。道端にはヒオウギアヤメ、エゾカンゾウ、センダイハギ、ハマナスなど様々な花が一面に咲く中に、薄黄色のコケイランも在りました。少し離れた所からスコープに入れ覗くと一つ一つの小さな花の花弁の巧みさと、花唇の複雑さに魅せられ、肉眼では見ることのできない別世界を覗く思いです。他にも色々な花を見ましたがスコープは鳥を見るだけでなく、花の観察にも役立ち花心の美しさは新たな発見になりました。

やがて前方の地面で餌を探すツメナガセキレイが見つかり一斉に注目です。時々草かげや窪地から姿を見せる度に歓声とどよめき、キセキレイとは異なった黄色の濃さの美しい雄や、やや地味な雌、キマユの特徴を表す眉斑の黄色は分かっても、ツメナガのツメの長さを易々と見分けるには困難な状況、多くの個体数がいた訳ではありませんが、原生花園の上を何度も飛び回る姿を追い、大勢と一緒に見る楽しさとともに大満足の一時でした。

原生花園の観察コースに入りますと胸丈ほどの草原にノゴマ、ノビタキ、オオジュリン、シマセンニュウ、コヨシ

キリなどが随所で見られ、やや草丈の高いアマニュウ、エゾノシウド、オオバハナウドや穂咲きのコバイケイソウ、エゾカンゾウ、ヒオウギアヤメ、ワタスゲなどの他に覚え切れないほど沢山の花々を心ゆくまで楽しませてくれました。中でも沼の対岸をオレンジ色に染めたエゾカンゾウの群落、スコープで覗いたカラマツソウ、コケイランの美しさが強く印象に残りました。

一周を終え満足気な表情で集まった広場で、全員がはしゃぎながら記念の写真を写しベニヤ原生花園を後に昼食のためホテルへ戻りました。

昼食を済ますとこれまでの一連の予定は無事終わりバスに乗り込み帰途へ、道北の山間酪農地帯を過ぎるころから2日間の雲も晴れ、涼しさから夏の暑さへと道北との気象状況の違いを感じました。

美深と塩狩峠で小休憩。「塩狩峠」は作家三浦綾子が昭和41年4月から2年半にわたりキリスト教関係の月刊誌に連載された小説で(後に新潮社から単行本として出版)、明治42年2月に発生した塩狩峠での列車事故に遭遇したクリスチャンであった鉄道職員が、大勢の乗客の命を救おうとその身を犠牲に殉職した一青年の、愛と信仰に貫かれた感動的な長編小説の舞台となったところで、その遺徳を偲ぶ記念碑が建てられています。

刻まれた碑文に90余年前の当時を思い浮かべながら、ひ

とときの想いを後に塩狩峠を離れ上川の穀倉田園地帯の風景をぼんやり眺めていました。

いつしか楽しかった思いで満足心の心地よい疲れに誘われ車内は夢心地の静けさの中、バスは旭川鷹栖から高速道路を砂川サービスエリアに立ち寄り、ここでバスから降りて身体をほぐし一路札幌へ、高速道路から市内の一般道路を経て予定時間より少し早く出発した大通西1丁目NHK前に無事到着しました。

2日間ではありましたが花・鳥・自然とともに過ごしたことが、新旧会員の別け隔てなく語り合い、感動も喜びも分かち合う楽しさの中から親交を深める良い機会になりました。

参加者へのアンケートによりますと、来年もまたこんな企画をとの希望が圧倒的で、今後検討課題を残すことにもなった訳ですが、この計画実行の中心的役割を果たされた蒲澤鉄太郎さんの並々ならぬご尽力と担当幹事の方々のご苦勞、そしてドライバー・ガイドさんの快い協力、参加者の皆様方の秩序ある行動と連帯感のおかげで、会の創立30周年記念に相応しい意義ある楽しい一泊探鳥会を無事終えられましたことに感謝の意を表すとともに、今後の会の発展のための在り方についても耳を傾けて行きたいと思っています。

野口正男さんを偲んで

羽田 恭子

会員の野口正男さんが亡くなりました。平成12年8月29日。享年87才。今年1月の藤の沢探鳥会には、お元気で出席されていたというのに。

野口さんは、北海道野鳥愛護会発足当初からの会員で、昭和52年から5年間、探鳥会幹事として活躍されました。

野口さんを偲ぶ時、その類稀な聴力に言及しないわけにはいきません。年を重ねられても、その卓越した鳥声の識別能力は、全く衰えることなく、益々冴えて、野外では同行の誰よりも早く、鳥の囀りを的確に聴き分けて、教えて頂いたものでした。普通、加齢と共に聴力は衰えるものと

思っていましたが、野口さんは、天性プラス、日頃の研鑽で、見事に若いままの、いやそれ以上の聴力を維持していられたのは、敬服の至りでした。

野幌森林公園を歩き乍ら、オオルリやキビタキ、ウグイスやアオジの囀りを愛で、又、草原でノビタキやノゴマ、シマアオジを愉しんでいられた野口さん。鳴く虫の音もお好きで、邯鄲の声にじっと耳を傾けて、聴き入っていた野口さんの、そんなお姿に、もう接することが出来ないのは、誠に残念でございます。

心から、ご冥福をお祈り申し上げます。

不明鳥とsp.について

9月3日の鶴川探鳥会の記録にタシギsp.というのがあります。河口にむかう牧草地からバサバサと飛び立った鳥だったのですが、鳴きもせず、すぐに遠くへ飛んで行ってしまったので種を確認できませんでした。でも大きさや形から、多分タシギかオオジシギだろうということになりました。確認できなかったのですから、ひょっとしたら、本

当にひょっとしたらハリオシギとかチュウジシギなんていうとても珍しい鳥だった可能性もありますが、それはちょっと置いておきます。

記録としてシギsp.でもなく、ジシギsp.でもなく、どうしてタシギsp.なのでしょう。何々の一種としてsp.とすることはよくあります。SPとかSpとかではなく、小文字

のspで、ピリオドをつけsp.とします。種を意味するspeciesの略です。タシギsp.としたのは「タシギ属の一種」という意味です。もともとsp.というのは専門的な英文表記の方法です。ちょっと固苦しいのですが種名(種に付けられる学名)について書いてみます。

たとえばオオジシギはチドリ目、シギ科、タシギ属の鳥で、*Gallinago hardwickii*といいます。*Gallinago*はタシギ属を表し、種小名である*hardwickii*をつけて種名とします。属名と種小名の二つを並べて(これを二名式名といいます)種名とするわけです。属名は大文字で、種小名は小文字で始め、どちらも斜体(イタリック体)にします。ちなみにタシギは*Gallinago gallinago*です。なお、亜種の場合には、種名の次に亜種小名をつけます(三名式名)。

通常sp.を使うのは、属まではわかっても種がはっきりしない時です。今回のようにタシギ属まではわかる場合、*Gallinago* sp.とします。科までしかわからない場合、たとえばシギ科SCOLOPACIDAE(通常大文字表記)の一種についてSCOLOPACIDAE sp.とすることもあります。

以上は専門的・学術的表記ですが、日本語での表記は基本的にはその埒(らち)外にあります。何の取り決めもな

いといっても構いません。とは言えsp.を用いようとする場合、それがどんな鳥かある程度の見当づけができる方がいいと思います。たとえばシギsp.としたらどうでしょうか。小さいトウネンも、大きなホウロクシギも全部含まれてしまいます。もしトウネンのような鳥でしたら、トウネンはオバシギ属ですから、オバシギsp.とすればいいのですが、オバシギ属でなじみの深いものとしてはトウネン、ヒバリシギ、ハマシギといったところで、トウネンに似たミユビシギは違う属(ミユビシギ属)ですから対象外になります。またオバシギsp.からトウネンやハマシギを連想するのも少々困難かもしれません。

こんな時、いっそ小型シギsp.とでもしたらいかがでしょうか。日本語表記の中にsp.を使う時、先に書いたように、その使い方に特別な取り決めもないのですから、ともかくもどんな鳥かがおよそわかるということを最優先した方がいいと思います。今回の鶴川の記録ではタシギsp.としてリストに載せましたが、種不明の鳥についてはリストに載せず、追加コメントとして別記した方がいいのかもしれませんが。今後の検討課題です。

文責：広報部

松山資郎先生への追憶

竹越俊文

平成12年8月17日、松山資郎先生が、横須賀市で世を去られた。行年93歳をむかえられていた。

日本の野鳥保護や鳥類研究の基礎を築いた方々の一人であられるが、ここではそうしたご事績の紹介を申し上げないで、平成9年に90歳で「野鳥と共に80年」を上梓されており、それをご覧いただくことにしたい。

まず、ご生前には北海道とは直接にご縁がなかったのであるが、道内の鳥については、深い関心をもたれていたということを述べたい。私は半世紀にわたるご親交をいたできてきたので、私だけが知っていることを、本誌に記して、とどめておきたいと思う次第である。

昭和22年7月、林野庁の猟政調査室をお訪ねして、私は松山さんに初めてお目にかかっている。同年9月、林野庁主催で、新狩猟法講習会が札幌で開催された。松山さんは講師として来道された。しかし、お仕事として、北海道にいられた唯一の機会となったことをいつまでも残念がられていた。

昭和28年4月、私は林野庁研究普及課へ転任し、当時「森林害虫防除室」に在任されていた松山さんを直接の上司として勤務した。

いまでも感謝申し上げていることがある。それは、松山さんが創刊から手がけられていた「森林防疫ニュース」と

いう月刊の機関誌があり、その編集業務をさせていただいたことである。ずっと後には幾種かの編集をするようになった私は、当時そうした面ではまったくの素人で興味もなかった。執務に必要なことを細部にわたって教えていただき、あとは否やもなく任せられた。たちまち熱中してその後数年間も勉強できたのは幸であった。

昭和43年3月、農林省を退官された松山さんは、(財)山階鳥類研究所へ事務局長に迎えられ、昭和53年に研究所を退任されている。

私は昭和35年、札幌へ戻り、昭和44年に32年間の山官生活を退き、(株)林業新聞社北海道支局へ入り、今日に至っている。

かねて松山さんは、新聞・雑誌に掲載された野鳥の記事を保存することがどんなに重要なことか説かれていた。私は目にとまったかぎりの野鳥の記事を切りぬいてお手元へお送りしていた。北海道で掲載された記事をこのほかに喜ばれ、資料として整理したとお手紙をいただいている。後には野鳥にかぎらず、ヒグマやエゾシカにまで手をひろげた。それに対して、松山さんからはすぐにご感想を交えたご返信をいただいている。

ことに鉛害関係については、北海道は先駆者であるとしばしば書いて寄越されている。

この2年ばかり、健康を害されて、いままでの資料を提供される先のことや、整理に手間どるようになったことを申されていつので、切りぬきを送ることは遠慮した方がよいかと思うようになった。しかし、次のお便りには、新しい切りぬき記事をみると元気になるとあり、ご在世中は続けることにきめた。

鳥のお仲間とお話ししているときも、かつてお送りした記事のスクラップをだして確かめるといのように、記憶力がよい方で、毎年はくちょうのシーズンには写真をお送りしていた。松山さんは私にとって鳥のお師匠さまであり、私はそれくらいのことしかできない不肖の弟子ということになるが、これからは切りぬきをする目的も失った。

ご逝去を長女の方からお知らせいただいたが、眠るような大往生をされたと伺った。

文中、松山さんと記し失礼ではあるが、長年月にわたり、優しい先輩として接した私にとってはそれがごく自然なのだと思われたい。

最後に、松山資郎先生のご冥福をお祈りして筆をおく。
〒069-0814 江別市野幌松並町11-2

松山 資郎 氏

明治40年生まれ。盛岡高等農林学校(現・岩手大学)を経て農林省に就職し、主に鳥獣業務に従事。退職後は山階鳥類研究所事務局長、同資料室長、同顧問、日本鳥類保護連盟顧問、日本野鳥の会顧問、日本鳥学会名誉会員などを歴任。多くの著作があるが、平成9年に最後の著作「野鳥とともに八十年」が文一総合出版から出版された。

編集部注

谷口会長がフクロウの画集を作成

道民の森十周年を記念して9月15、16日の両日、当別町で「道民の森ふくろうフォーラム」が行われました。このイベントに合わせて本会の谷口一芳会長が「北の森からフクロウ賛歌 谷口一芳画集」を作成しました。画集は油彩作品45点で構成されて48ページ。本は環境にやさしい大豆油のインキ、紙は野草のケナフを使用しています。

谷口会長は風景画などを長年描きつづけてきましたが、40年前に北大付属植物園でフクロウに出会い、そのひとみに魅せられて、その後多くのフクロウの作品を残しています。

会長は「鳥や小動物が多い当別で育ったが、フクロウの神秘的な顔が魅力」と語っています。画集は販売されています。

価 格 2,000円(本体)

問い合わせ先 石島しのぶ

tel 011-621-5380

又は 谷口 一芳

tel 011-661-6138 まで。



鵠川探鳥会に 参加して

2000. 8.20

佐藤 幸典

鵠川駅前に一旦集合、四季の館に移動して「ネイチャー研究会 in むかわ」の人達と合流。挨拶をしたり、ネームプレートを付けてもらったりの後ゾロゾロと出発。

数日前の大雨で柵を越えると、すごいぬかるみの中を探鳥会は始まった。柵を越えたばかりのところは第1ポイントですが、タカブシギらしいのがいつものごとく飛んでしまっ、私には?でした。タシギ、ヒバリシギも確認されたようです。

ヒバリが飛び立つたびに何シギ、何チドリと一生懸命見

るのですが、ヒバリはやはりヒバリでした。

右岸まで着き第2ポイント。対岸にカワセミが数羽見られ皆さんやと欲求不満解決。次はカモメウォッチングです。ウミネコ、オオセグロカモメ以外は確認できず。

ショウドウツバメを見ているとツバメを見つけた。何人かも確認できた。まだいるのですねと会話もはずむ。

帰りに柵の水たまりにソリハシシギが2羽。双眼鏡でも望遠鏡でも皆でゆっくり観察できて、何となく責任を果たした気分。

今までもこれからも鵠川には長靴をお忘れなく。

〒068-0834 岩見沢市駒園7丁目7番19号

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、チュウビ、マガモ、カルガモ、タカブシギ、ソリハシシギ、タシギ、ヒバリシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、シマセンニユウ、オオジュリン、カワラヒワ、

スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト
以上27種

【参加者】岡田幹夫、山田良造、村上トヨ、北山政人、板田孝弘、門村徳男、成澤里美、梅津譲一、高橋良直、岸谷美恵子、戸津高保、小山内恵子、佐藤幸典、蒲澤鉄太郎、藤谷節子、小堀煌治、山本昌子、佐藤正秀、鈴木繁雄・英子、広木朋子、清水朋子、沢田浩一・路子、山口和夫

以上25名

【担当幹事】佐藤幸典、戸津高保

念願かなった鵠川の探鳥会

2000. 9. 3 佐藤光子

朝のラジオ放送、自然情報で今回の探鳥会のことを知った。前日のすごい雨であきらめていたが当日になってすばらしく晴れ、期待に胸ふくらませ車を走らせた。

バードウォッチングは一度夢中になったが、ここ2年ほど足が遠のいていた。というのもそれまでは、いつも一緒に動いてくれた息子が、あっさりと親離れし、ひとりになってしまったからである。

静内川は、とくに冬、カモ類が多く、それも車中から容易に観察できるので、今回のように、こんなに歩いてのウォッチングは、初めてであった。

牧草地の牛フンを気にしつつ、ぬかるみに足をとられながら、双眼鏡を手にさがすもサッパリ、あまりにも広すぎて25倍では、アオサギを確認するのみ。それでも、最後に、始めて見せてくれたアオアシシギのかわいらしいしぐさに満足。

今回の私の目的は、鵠川のシギ類のいる場所の確認であった。でもひとりでは、来れるかなと、チョッピリ心配。やっぱり次回の探鳥会かなーと思ってしまう消極的な、自分風を楽しんでいるところである。

今回は、ベテランのバードウォッチャーさん達と交わり、楽しいひと時をともにできたこと、みんな生き生きしてて、人生を楽しんでいる姿、いいですね。また会う機会まで。ありがとうございました。

〒056-0023 静内町ときわ町1丁目2-8

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ハイタカ、オオタカ、コガモ、カルガモ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、タシギsp.、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、キジバト、カッコウ、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト
以上27種

【参加者】門村徳男、世永正明、佐藤正秀、藤谷節子、片山 實・慶子、小山内恵子、田中哲郎、佐藤光子、栗林宏三、中正憲信、佐藤幸典、松原寛直・敏子、池田、北山政

人、三船喜克・幸子、樋口孝城・陽子、佐藤ひろみ

以上21名

【担当幹事】佐藤ひろみ

野幌森林公園を歩いて

2000. 10. 15 小西 芙美枝

家が近いので週三回くらいは散歩コースにしているのを見慣れている景色なのですが、御一緒させていただき、いろいろ教えていただいたこの日は、鳥達、木々、野草、水鳥、光線などが融合して感傷的な言い方をゆるしていただければ、森は大きな命として私達を遊ばせてくれていることに思っていた一日となりました。

みなれているヒヨドリがこの時期、南へ渡るということも教えていただいて初めて知ったことです。室蘭の地球岬あたりより千羽、二千羽と群をなして、外敵に備え、海面すれすれに飛ぶということ。私はつい目の前の景色から離れて、この光景を目にした人の陶醉を思ってしまう、そして群の中の幾羽かは力尽き波の上でその一生を終えるのではないか、ひょっとしたら波の美しさに魅せられ不意に羽搏きを止めてしまいたくなる一羽もいるのでは…などと思いが食したとはおっしゃっていません。この鳥は人の目の高さに巣をつくること、混群して外敵から身を守ること、さらに餌をとる場所を遠く内紛を避けることなどを聞いているとカケスがあらわれ、これは私も双眼鏡で捉えることができました。地鳴きも聞くことができました。

大沢の池の鴨は私達一行が近づくと光線の加減でしょうか白い光の束のように一斉に翔びたち、そして又戻ったのでしょうか、何十羽も水面に見ることができました。池の対面の斜面にはツバメオモトが青い小さな実を三粒ほどぶらさげていました。

大沢園地での昼食後、エゾリスを見、そして直線にしたら四十センチくらいの蛇の子供が逃げもしないで、首をもたげ、口をいっぱい開き、周りの人間を威嚇していました。一度踏まれており、逃げるのができないとのことでした。御一緒させていただいたおかげで、小さな蛇の何度も何度も甲斐のない威嚇にも立ち合うことができました。楽しい一日をありがとうございました。

〒069-0834 江別市文京台東町22-3

【記録された鳥】カイツブリ、オシドリ、コガモ、マガモ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、イカル、カケス、ハシブトガラス
以上27種

【参加者】岡田幹夫、富永まさ子、今村三枝子、長尾由美子、池田資郎、早川和良・和子、中井和夫、川守田順吉、

井上公雄、栗林宏三、内山正裕、運野宗一郎・淳、柏葉明、吉川摩由、村田静穂、小西美美枝、松原寛直・敏子・綾子、佐々木友子、佐藤英樹、山田良造、富川 徹、板田孝弘、戸津高保・以知子、横田通典、竹中宏二、栗原弘義、

斉藤充史、鬼頭研二、三船幸子、鍋城美代子、中正憲信・弘子、木井雄一郎、白澤昌彦
以上39名

【担当幹事】 富川 徹、三船幸子



【小樽港とその周辺】

2001年1月21日(日)

この時期小樽港及びその周辺の海では越冬のため渡来している主に海カモ類やカモメ類などを見ることができます。この日は貸切りバスを利用し

高島岬の祝津海岸、祝津漁港、北浜岸壁、色内埠頭、第3埠頭～勝納埠頭、若竹貯木場などを回り観察します。観察される主な種類はアビ、オオハム、ウミウ、シノリガモ、ホオジロガモ、コオリガモ、ウミアイサ、ケイマフリ、ウミガラス、ウミスズメ、シロカモメ、ワシカモメ、ミツユビカモメ、などの各種カモメ類の外25～30種類位になります。

昼食と温かい身仕度で参加してください。

集合＝JR小樽駅出札口付近 9時30分

バス代が1,000円程度かかります。

事前の申込みが必要です。

申込先＝白澤宅 電話又はFAX563-5158

電話の場合は午後6時～8時までとします。当日、自家用車でのバスへの同行はご遠慮ください。

【野幌森林公園】 2001年2月4日(日)

雪に覆われた森は厳しい寒さの中で近づく春を待ちながら冬眠の最中です。こうした中でも冬鳥として渡来するキレンジャク、ツグミ、アトリ、マヒワらと留鳥のアカゲラ、コゲラ、キバシリ、キクイタダキ、カラ類、ウソ、シメなどがこの時期の主役になりますが、ハイタカ、オオタカ、カケスなどももり立て役として期待されます。

歩くスキーのコースですのでつば足でも歩けます。

集合＝大沢口駐車場入口 午前9時

交通＝新さっぽろバスターミナル発夕鉄バス

JRバス文京台線

【円山公園】 2001年3月4日(日)

3月ともなれば日中の日差しも強く雪解けも始まり春を感じる季節です。季節に敏感な野鳥たちの動きも活発になり轉りやドラミングも聞かれるようになっていきます。

観察される主なものはアカゲラ、コゲラ、ヤマゲラ、キクイタダキ、カラ類、ツグミ、キレンジャク、マヒワ、アトリ、シメ、ウソなどですがそろそろカワラヒワが渡って来るところです。昨年春には神宮の境内にクマガラが度々姿を見せていました。今年はどうでしょう。

集合＝円山公園管理事務所前 午前9時

交通＝地下鉄東西線円山公園下車、駅から徒歩3分

【ウトナイ湖】 2001年3月25日(日)

この時期ガンカモ類を中心にした水鳥が、北の繁殖地へ向かう途中の中継地としてこのウトナイ湖には多くの水鳥が集まります。マガン、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウ、コブハクチョウなどの大型の水鳥にマガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、ミコアイサなどのカモ類にオジロワシ、オオワシなど充分楽しめる探鳥会です。

集合＝午前9時30分 ウトナイ湖畔駐車場湖畔側

交通＝新千歳空港発道南バス(苫小牧行き)

ウトナイレイクランド前下車

☆観察用具、図鑑、筆記具、昼食、雨具などをお持ちください。

☆交通機関を利用の方は、各自でお確かめください。

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

☆探鳥会の問い合わせは

011-251-5465 自然保護協会事務所まで

(月～金曜日 10:00-16:00) 時間厳守のこと

鳥民だより

◇新年講演会のご案内

新年講演会を下記の要領で開催いたします。

・日時：平成13年1月13日(土) 13:30～

・場所：札幌市女性センター

札幌市中央区大通西19丁目

・講師：綿貫 豊氏

北海道大学大学院農学研究科動物生態学分野

綿貫豊氏は北海道大学助教授で、現在の研究課題は「海洋環境変動に対する海鳥の反応」で、国際的に活躍しておられます。また、科学者としての研究のみならず、海鳥保護などにもたずさわり、幅広い活動をしています。今回は天売島の海鳥の生態などを中心とした話をなさると伺っています。

・演題：北海道に生活する海鳥たち

・スライド映写

皆さんの持ち寄ったスライドを映写します。たくさ

んの作品の参加をお待ちしています。

・会費：500円の予定です。

◇写真展の作品を募集します

平成13年度も野鳥写真展の開催します。場所は光映堂
フォトギャラリー（札幌市中央区大通西3丁目）で、5
月8日から5月28日までの予定です。次号でもあらため
てお知らせしますが、奮ってご参加ください。

◇会費納入のお願い

平成12年度会費を未納の方は、できるだけお早めに納
入ください。愛護会の健全運営は会費の順調な納入にか
かっています。

◇ご寄付御礼

今年8月に逝去された会員の野口正男様のご遺族から
野鳥愛護会に10万円のご寄付をいただきました。慎んで
御礼申し上げます。

日本鳥類目録改訂第6版発行

日本鳥学会による日本鳥類目録改訂第6版が完成し、
今年（2000年）9月15日に発行されました。1974年に
第5版が出て以来の新しい版です。一般にはさまざま
な鳥類図鑑などが発行されていますが、これは日本の
公式な鳥のリストで、日本でこれまでに記録のある鳥
について、分類学上の位置付け、名前（学名、和名、
英名）、分布などを示したものです。この目録には、
18目、74科、230属、542種と外来種26種が収録されて
います。また、検討中の34種・亜種が、採用されなかつ
た理由とともにまとめられています。英文が主体です
が、和名、分布、生息環境については和文でも書かれ
ています。

一般書店では販売されていないので、入手希望の
方は直接下記の日本鳥学会事務局に注文してください。
価格は¥4,200+送料¥400で、送金は同封する郵便振
替となります。

〒080-8555 帯広市稲田町西2-11

帯広畜産大学野生動物管理理学研究室

日本鳥学会

ファックスの場合 0155-49-5504

メールの場合は fujimaki@obihiro.ac.jp

野鳥だより原稿募集

北海道各地の探鳥地紹介、野鳥観察記録、野鳥に関
する話題などの原稿を募集しています。街角で見かけ
た野鳥、庭に訪れた野鳥など、身近な野鳥についての
話題も歓迎です。

原稿の送付、投稿のご相談は広報代表・樋口孝城ま
で。

〒002-8065 札幌市北区拓北5条2丁目10-17

電話 011-771-4470

☆☆☆ 会 員 名 簿 ☆☆☆

【新しく会員になられた方】

岸田由美子 ☎011-0037

札幌市北区北37条西2丁目2-5

藤原 伸彦 ☎061-0223

和子 石狩郡当別町弥生53-43

高橋 良直 ☎006-0851

札幌市手稲区星置1条6丁目8-1

長尾由美子 ☎004-0880

札幌市清田区平岡10条1丁目21-5

西川 孝義 ☎069-0834

江別市文京台東町13番地2

川崎 賢一 ☎059-1501

勇払郡早来町大町177-24

鈴木 正之 ☎062-0031

札幌市豊平区西岡1条10丁目3-10

遠藤 美浩 ☎066-0015

千歳市青葉5-6-5

荒木 良一 ☎007-0808

札幌市東区東苗穂8-2-6-11

田中 哲郎 ☎053-0035

洋子 苫小牧市字高丘6-12-B 206

右近 和子 ☎064-0952

札幌市中央区宮の森2条6丁目4-308

藤岡 郷子 ☎065-0027

札幌市東区北27条東19丁目1-23

池田みちえ ☎005-0013

札幌市南区真駒内緑町4丁目1-9-103

打越 秀和 ☎063-0035

札幌市西区西野5条6丁目2-17

小山内恵子 ☎054-0032

勇払郡鵜川町福住町3-144

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465